

## 太宰治「股をくゞる」論

黄翠娥\*

### 要旨

本論文は太宰文学の「中国物」の一作目の作品「股をくゞる」を取り上げ、「中国物」から太宰文学の真髓を探ると同時に、この作品をもとに日中両国の観点を比較しようとするものである。研究方法としては、まず、テキストと中国の『十八史略』、『史記』の中の「淮陰侯列伝」と比較し、両者の主題を明らかにし、さらに、この作品における太宰文学の要素を探り出していく。

「股をくゞる」からは三つの特徴を指摘することができる。一つは洗濯老婆を極めて醜悪化したこと、次は人間不信の色が濃いこと、最後は屈辱感の描写が重点になっていることである。

そして、太宰文学においては、女性に対する嫌悪感や人間不信、また屈辱感及びその対応などは確かに、太宰文学における重要なテーマになっている。そしてこれらはすでに「股をくゞる」に内包されているのである。したがって、太宰文学の研究において「股をくゞる」は決して見過ごすことのできない作品なのであろう。

このように、太宰の「股をくゞる」は、『史記』の「淮陰侯列伝」の中国の名将の大功名の元ともなる「堪忍力」を借りつつも、自分の鬱憤の情を訴える作品となっているため、極端に言えば、太宰は自分の生々しい生き様を語るために、中国の文献を借用したことは的確である。

キーワード：太宰治 「股をくゞる」 『史記』 比較文学

屈辱感

---

\*輔仁大学日本語文学科 助教授

## 太宰治「股をくゞる」論

黃翠娥\*

### 摘要

本論文是以太宰治的「中國翻案作品」中的首作〈股をくゞる〉為探討對象，分析這部作品在太宰治文學中所扮演的腳色，以此來研究太宰文學的真髓；同時透過這部作品來比較中日觀點的差異性。在研究方法方面，主要是比較文本與中國《十八史略》、《史記》中的〈淮陰侯列傳〉，比較出兩者的主題。

〈股をくゞる〉具有三個特徵：第一個是對於漂母的極端醜惡化；第二個是主人翁對人的不信任感；最後一個則是作品中瀰漫著屈辱感。而從對太宰治其他作品的分析中了解到，對於具有照顧他人能力的女性容易懷抱嫌惡感；對人普遍的不信任；以及作品中不分男女腳色總是容易出現受辱的感受，這三者確實是太宰文學中的重要主題，因此可說包含這三要素在內的〈股をくゞる〉是研究太宰文學的重要關鍵作品。

〈股をくゞる〉把《史記》〈淮陰侯列傳〉中中國名將為人所讚譽的「忍耐力」，改寫成對於受辱的深刻感受，這樣的翻案說明了太宰治借用中國文獻的目的與態度了。同時也可以看出像韓信這樣的英雄人物所傳頌下來的美談，傳到日本之後如何地被詮釋了。

關鍵詞:太宰治 〈股をくゞる〉 《史記》 比較文學 屈辱感

---

\*輔仁大學日本語文學系 副教授

## On “The Humiliation of Crawling between a Ruffian's Legs” by Dazai Osamu

Tsui-o Huang\*

### Abstract

Dazai Osamu had written a series of literary adaptations of Chinese works. “The Humiliation of Crawling between a Ruffian's Legs” (“matawokuguru” hereafter referred to as “The Humiliation of Crawling”) is the first among the series and the target of the analysis in this paper. In order to understand the significance of the Dazai’s oeuvre, the paper tries to ascertain the role that this work plays among in the corpus by Dazai and to show the discrepancies between the Chinese and the Japanese perspectives. As for the research methodology, the paper will focus on the comparison between the text by Dazai and the Chinese works including both Eighteen Histories in Brief (Shi Ba Shi Lue) and “The Biography of The Marquis of Huaiyin” in Records of the Historians, with the intention to present their respective motifs.

Dazai’s “The Humiliation of Crawling” has three characteristics. First, the image of the yarn rinsing old lady (known as “Piao-mu”) is extremely smeared. Second, the protagonist expresses a great deal of distrust in human nature. Third, the sense of humiliation is pervasive throughout the book. From the reading of Dazai’s others works, we know that negative portrayal of women who are capable of taking care of others, distrust in human beings, and constant feelings of humiliation are the common features. Therefore, “The Humiliation of Crawling,” comprising the quintessential themes that can be found in Dazai’s other works, becomes a key piece of writing for the study of Dazai.

Dazai did not emphasize the great perseverance that this great Chinese general was praised for, but instead he paid attention to his humiliated feelings. Dazai’s

---

\* Associate Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

modifications revealed his purposes and attitudes toward the use of Chinese references for his literary creation. Furthermore, we can see how the Japanese interpret the praising tales of a heroic figure like Han Xin.

Keywords :

Dazai Osamu, “The Humiliation of Crawling between a Ruffian's Legs”

(“matawokuguru”), Records of the Historians (Shiji), Comparative Literature, Sense of Humiliation

## 太宰治「股をくゞる」論

黄翠娥

### 1. 始めに

日本の近現代文学には中国の作品の翻案が少なからずある。それらの作品には、純粹かつ客観的に中国文化を伝えようとしたものもあれば、中国の物語を借りて、自分の思想を反映させているものもある。後者では、太宰治がその名手の一人であると言えよう。例えば「惜別」は仙台留学中の魯迅をモデルにして書いた作でありながらも、太宰自らの文学世界が色濃く反映された作品となっているのである。このような作品は太宰文学研究において、決して見逃すことのできないものであると同時に、翻案小説であれば、比較という視点が入り込んでくるため、作品からそれぞれの文化の差異もある程度究明することが出来、研究の価値を有していると言えるだろう。本小論はこのような視点から、太宰文学の習作期に書かれた「中国物」の「股をくゞる」を取り上げ、韓信像をめぐる日中両国の観点を比較すると同時に、この作品を通じて太宰文学の真髓を探ろうとするものである。

まず、簡単に日中における韓信像を論じよう。韓信は張良、蕭何と共に漢高祖劉邦の配下三傑とされ、劉邦の元で無数の戦いに勝利し、その覇権の成立に大いに貢献した軍事史上の名将である。だが、最後は呂后に「謀反の疑い」で斬られ、悲運の将軍としても知られている。この韓信をめぐるのは「背水の陣」、「四面楚歌」、「国士無双」、「一飯千金」、「狡兔死して走狗烹らる」など、現在でもよく使われている成語があり、またこの韓信の少年時代の逸話「胯下の恥」（「淮陰辱」ともいう。）は非常によく知られている。

古来、中国では、特に少年時代に起こった「淮陰辱」、「胯下の恥」というシーンを取り上げ、同情的な立場から、この韓信の辛い境遇を語った作品がある。例えば、李白は韓信のこの少年時代の出

来事について相当の詩作を残しており、その中でも「行路難三首」は特に名高い。「淮陰市井笑韓信、漢朝公卿忌賈生」<sup>1</sup>という言葉を使って、人生の道は歩きにくいと述懐しているのである。

しかし、この物語をめぐるのは、何よりも「堪忍」の重要さがより重要なテーマとなっている。この逸話は、韓信が町の少年たちに「剣を出すか、股をくぐるか」という選択を迫られた時、まず落ち着いて周囲の状況を観察し、敵が多く、剣を抜いて相手を殺しても、自分の将来にはよくない結果を残すだろうと考えた挙句、「股をくぐる」ことに決めるというものだが、「堪忍」という美德があるからこそ出世が出来たという教訓として読まれ続けてきたのである。中国文化では、「大望を抱く者はむやみに腹を立てずよく辛抱すべき」という古訓は中国人がよく耳にするものであり、古来よりこのような「教訓」を表した文章が多い。「天將降大任於是人也，必先苦其心志，勞其筋骨，餓其體膚，空乏其身，行拂亂其所為，所以動心忍性，曾益其所不能。」<sup>2</sup>や「古之立大事者，不唯有超世之才，亦必有堅忍不拔之志」<sup>3</sup>などの文章は能力のある人間になれるのは、様々な苦しみ、試練を舐めたからこそだ、有能者にとっては「堪忍」は基本的な条件だと語ったものである。李白の「贈新平少年」という詩においても、「韓信在淮陰，少年相欺凌。屈體若無骨，壯心有所憑。一遭龍顏君，嘯咤從此興。」<sup>4</sup>として、韓信には惨めな過去があるが、偉大なる志があったからこそ、機会を得て、すぐ出世立身が遂げられたという主旨を述べているのである。

それから、中国では英雄を論じている場合、「英雄は出身によらない」という言葉がよく使われるが、韓信の出身も当然そのうちの一つのいい例である。大將軍としての韓信の業績を述べる場合には、必ず彼の少年時代の「胯下の恥」が触れられ、英雄の惨めな過去は、

<sup>1</sup> 李白「行路難三首其二」(『李太白全集』 p94)

<sup>2</sup> 孟子「告子章句下」(『孟子譯解』 p 309)

<sup>3</sup> 蘇軾「晁錯論」(『蘇氏文集卷四』 p 109)

<sup>4</sup> 李白「贈新平少年」(『李太白全集』 p246)

むしろその非凡な生涯における不可欠な要素だとされるのである。

また、他にも韓信の故事からよく読み取られる教訓がある。それはつまり、「恩返し」と「約束の確実な履行」である。韓信が漂母から食を与えられた時、将来は必ず報恩すると言い、大將軍になると、その約束通り恩返しをする。また、「徳を持って怨を報ずる」という美德も韓信の故事から読み、股下をくぐらされた男を武官に任じたのは、美談として世に伝えられているのである。

それでは日本では、韓信はどのように語られているのであろうか。

以前から「狡兔死して良狗烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵められ、敵国破れて謀臣亡ぶ」という成語が示すように韓信の悲運が描写の重点となっている<sup>5</sup>ほか、特に近年来の韓信にかかわる著作を見れば、韓信の武将としての才能、軍師としての知略についての描写も重点の一つとなっていることがわかる<sup>6</sup>。

それでは、「股くぐり」をめぐるはどうであろうか。「小学国語読本」に掲載されていたこの韓信についての部分は「堪忍」という倫理徳目を顕揚させるという意図があり、「ならぬ堪忍するが堪忍」という「堪忍」をめぐる倫理的観念が重要視されている<sup>7</sup>。また、長与善郎が大正 14 年に「項羽と劉邦」という戯曲を登場させ、武者小路実篤は大正 12 年に「韓信の股くぐり」という作を書いている。前者では特に第四幕第二場の「巴蜀山中における劉邦の屯」で劉邦、韓信、蕭何、樊噲、夏侯嬰等が団欒している場面であるが、劉邦は特に韓信に向かって次のように述べる。

今迄の處では俺は不思議に運のいゝ男だ。あの鴻門の會

<sup>5</sup> 近代作品では、長与善郎の『韓信の死』という作品が特に名高いものであろう。(玄文社 大正 13 年)

<sup>6</sup> 岡本好古『背水の陣：悲將韓信の生涯』、『韓信：国士無双と謳われた天才武將』、石山隆『漢王劉邦物語』、机竜人『大軍師韓信』、神坂次郎『男戦いの日々：海の彼方の八つの話』などがある。石山氏の著作では、蕭何、韓信、張良の知略を紹介する。神坂氏の方は、特に戦闘の知略の分析に重点を置く。

<sup>7</sup> 「張良と韓信」(『小學國語讀本卷十 尋常科用』文部省 昭和 13.6 日本書籍株式會社 pp.96-97)、張良はその義理堅さで、韓信はその忍耐力によって、二人は後それぞれ漢の高祖に重用され、大功を立て、後世に名を残したという内容である。

でも俺は死ぬべき處を助かつた。併し韓信、あの項羽が俺に鞆を取つて穿かせろと云つた時、そして俺が此鬚でその鞆の塵を拂つてやつた時、もしお前が以前あのならず者共の股くぐつたと云ふ手本を俺に見せてゐて呉れなかつたならば、俺は堪忍の緒を切つてあの場で死んでゐたかも知れなかつたのだ。善い行ひの手本は作つておくべきものだな。それは人を生死の境から救ひ出す事も出来るのだ<sup>8</sup>。

即ち、長与善郎の作品においても、韓信の股くぐりは美德として見なされるのである。

しかし、後者の、わずか数ページしかない武者小路実篤の作<sup>9</sup>は全篇を通して韓信の侮辱場面及び「今に見ろ」という言葉を繰り返す鬱憤の深さ、執念深さ、さらに家のものにまで自分の屈辱感を隠すのに腐心する様子などが描写されている。その中にはまた主人公の「股をくぐてゐる自分の方が、股をくぐらしてゐる彼等よりもくらべものにならない程優れた人間だと云ふことをはつきり自覚した。」という自負心もリアルに描き出されている。このほか、歴史の視点に立って書かれた作品ではこの「股くぐり」の事件を高く評価する傾向にある<sup>10</sup>。それでは、太宰治の「股をくぐる」は上に述べた著作群の中でどのような特質を有しているのであろうか。まず、原典との比較を通してこれについて考えてみたい。

## 2. 原典との比較

『十八史略』と『史記卷九十二』「淮陰侯列伝第三十二」の原文

<sup>8</sup> 「項羽と劉邦」(『現代戯曲全集』第八巻 国民図書株式会社 大正 14.10 p 519)

<sup>9</sup> 武者小路実篤「韓信の股くぐり」(『武者小路実篤全集』第五巻 芸術社 大正 13 pp.33-40)

<sup>10</sup> 例えば「英傑の群像」(『漢文名作選』第2集 大修館書店 1999.9 pp.150-151)では、「信之を熟視し」と表現されている態度には彼本来の策略家としての片鱗が窺える、また、「私に恥をかかせてくれた時、当然殺してしまうこともできた。しかし、殺す程の価値も無かつた。この者のおかげで我慢を重ねて、今のこの地位を得たのだ」と韓信の言葉を引用して、股くぐりの意義を認めているのである。

を引用して見てみよう。

初淮陰韓信。家貧釣城下。有漂母。見信饑。飯信。信曰。吾必厚報母。母怒曰。大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食。豈望報乎。淮陰屠中少年。有侮信者。因眾辱之曰。若雖長大好帶劍。中情怯耳。能死刺我。不能出我胯下。信熟視之。俛出胯下蒲伏。一市人皆笑信怯<sup>11</sup>。

淮陰侯韓信者、淮陰人也。始爲布衣時、貧無行、不得推擇爲吏、又不能治生商賈、常從人寄食飲、人多厭之者、常數從其下鄉南昌亭長寄食、數月、亭長妻患之、乃晨炊蓐食。食時信往、不爲具食。信亦知其意、怒、竟絕去。信釣於城下、諸母漂、有一母見信飢、飯信、竟漂數十日。信喜、謂漂母曰：「吾必有以重報母。」母怒曰：「大丈夫不能自食、吾哀王孫而進食、豈望報乎！」淮陰屠中少年有侮信者、曰：「若雖長大、好帶刀劍、中情怯耳。」眾辱之曰：「信能死、刺我；不能死、出我袴下。」於是信孰視之、俛出袴下、蒲伏。一市人皆笑信、以爲怯<sup>12</sup>。

『史記』では、餓えている状態や寄食先を追い出されたことなどが述べられているため、太宰の「股をくぐる」は『十八史略』よりも『史記』の「淮陰侯列伝」を敷衍したものだと言ってよいだろう。これはすでに長尾篤巖が分析しているが<sup>13</sup>、この『史記』の「淮陰侯列伝」は次のような物語である。

淮陰の出身の韓信は、貧乏で品行も悪かったために職に着けず、商売も出来ず、人にたかり食わせてもらって日々を過ごしていたので、皆に嫌われていた。韓信が特に長期間寄宿したのは、南昌の亭長の家である。その亭長の妻に食事を出されなかったため、怒って

<sup>11</sup> 『十八史略卷之二』（『漢文大系（五）』 pp. 22-23）

<sup>12</sup> 「淮陰侯列傳第三十二」（『史記卷九十二』 pp. 2609-2610）

<sup>13</sup> 長尾篤巖は「太宰治における中国文学の影響」（『太宰治・第5号』 p 114）において、「股をくぐる」には、寄食先に追い出された場面があるので、『史記』の「淮陰侯列伝」を敷衍したものだとしている。

居候先を離れ、川辺で釣りをして生活していた。そんなある日、「漂母」と呼ばれる川辺で洗濯婆さんたちの中の一人に握り飯を恵んでもらうようになり、それが何十日間も続く。韓信はその「漂母」に「必ず厚く御礼をする」と言うが、「漂母」は「あんたが気の毒だからしてあげただけのこと。御礼なんて望んでいない。」と怒る。

淮陰でのある日のこと、屠殺場の少年に「お前は背が高く、いつも剣を帯びているが、実際には臆病者に違いない。その剣で俺を刺してみろ。出来ないならば俺の股をくぐれ。」と挑発される。韓信は周囲の様子を見て、恥を忍んでその少年の股をくぐり、周囲の者はそんな韓信を大いに笑ったという。

原典はまたその後、韓信が劉邦に重用され、淮陰侯、齊王、楚王などになるところまで記されている。出世した韓信は例の漂母に恩に報いるべく黄金千斤を与え、寄食させてもらっていた亭長に「お前はちっぽけな男だ。わしに恩徳を施し遂げられなかった」と言いながら、銭百文しか与えない。それから、例の屠殺場の少年に徳を持って怨を報ずるように、武官の官職を就かせる。これが中国文献における本来の「股をくぐる」のあらすじである。

それでは、太宰の「股をくぐる」を見てみよう。「股をくぐる」は太宰治が19歳（昭和3年）の時、同人誌『細胞文芸』に、辻島衆二という筆名で発表した作品である。

腹が減って川辺に横たわっていた韓信は、川辺で洗濯をしていた醜悪な老婆から、ぞんざいに扱われながらも栗飯を施してもらう。韓信は貪り食った後、老婆の偉ぶった仕草に屈辱感と不満を持つようになる。この憤りをどう発散させようかと思案に耽けり、ふと強姦する妄想を抱く。川辺を離れた韓信は、人通りのない寂しい町をあても無く歩いていたが、その時、豚の屠殺場の連中十二、三人に出会い、取り巻かれて「釣を、して来たのかい。若殿様……いつもつんと澄まして居やがる。……一体どれ程の学問があるんだい……貧乏人は貧乏人らしくな……」（185）と嘲笑され、その中のリー

ダ一格の少年の股をくゞらされるという侮辱を味わう。作品は「半狂乱の態でどどどどとその群集の中に走り込んだ。……無茶苦茶に群集の中を飛びまはる」(187-188) という描写で一段落する。そして作者は「蛇足を附する」という主旨で、沼地まで走ってきて、さっき受けた屈辱を思い返し、復讐のことばかり考えている韓信の屈辱感を述べ続ける。

この「股をくゞる」からは三つの特徴を指摘することができるだろう。一つは洗濯婆さんを極めて醜悪化したこと、次は人間不信の色が濃いこと、三番目は屈辱感及び屈辱感によつての復讐の念の描写が重点になっていることである。

まず、洗濯婆さんを醜悪化したことについて述べたい。老婆は次のように形容されている。「干物ひものにされし猿の顔を思ひ出させるやうな奇怪な面相」、「細く、たゞれた首をぎゅうとねぢ曲げて、小さい眼を異様に輝かせながら」(178)、「蝦蟇の舌のやうなぬらぬらした声」、「黒鴉のやうに怪しく笑つた」、「凋びた顎」、「赤黒くごつごつして居る胸にかけて、穢れた黒い汗がだくだく流れて居る」(179-180)、「黒い大きな骨ばつた手」、「前歯の無い毒々しい程ネロネロした紫色の齒齧はぐきを異様にむき出して」(180)、「山椒魚のやうに、ぶるぶるした大きな唇」、「笑つてるやうな又泣いてるやうな不思議極まる声」、「古い紙茶袋のやうにくしゃくしゃした両の乳房。ねとねとした、割に太つて居る脚くび」(183)などと描写されており、原典とはまったく違うイメージの人物造形となっているのである。

次は、人間不信の部分であるが、原典では、老婆から施しを受けた韓信は「必ず厚く御礼をする。」というように、素直な、義理堅い人物として造形されているが、太宰の「股をくゞる」では、主人公は、老婆がくれた「無礼な贈り物」の栗飯を、老婆の偽善的な自己満足と解釈し、猜疑心の強い、ひねくれた人間になっているのである。

無料で他人に物を呉れる馬鹿者がどこに有るか。皆代償を欲して居るんだ。この婆だつて俺にあれを呉れて婆 独りで『施し』の快樂を味はうとして居るのだ。確かにそうだ。目色で判る。言葉で判る。……それに、あの婆にだつて今日食ふべきものはたつたあれだけしか無いんだ。婆にはあれが必要なんだ。それを俺に呉れる。するとどうなるか。…… (181)

このように、素直に他人の恩を受けることが出来ないのは「股をくぐる」の主人公の最も大きな特徴の一つなのである。

もう一つの、原典との大きな違いは「股をくぐる」全篇において、屈辱感及びそれによる復讐心に溢れている点である。「老婆は始めつから、彼の存在なんかにはてんで気附いて居らなかつたらしく、薄汚く蹲まりながら、河岸でぢやぶ、ぢやぶ、ぢやぶ、一枚の下袴を洗つて居た。彼はこの老婆の傲然たる愚鈍さには、少なからぬ屈辱を感じ」(178) ているし、また栗飯を目の前に出されても、「彼は直ちに其の栗飯に対する食慾を激しく感じながらも、老婆の今の言葉に或る不満を覚えぬわけには行か」ず、一方で「彼の方を振りむきもせず」(180)「老婆は彼の方をちらとも見ないで」(181) という老婆の言動を敏感に観察しているのである。そして、「あの醜怪な婆に……何とか仕返へしが出来ないものか。」(182) と復讐の情が高めていく。また、後の屠殺場の連中に侮辱される場面も前述したように生々しく描写されている。「彼は無論これ等の青年に満腔の同情を寄せて居た。愛してさへ居た。だが彼はこの青年等の無遠慮に依つて彼の自尊心を傷けられる事が恐ろしかった。」(186) と、老婆とのやり取りの中の状態とまったく同じように、自尊心を傷つけられることに何よりも不安を感じるのである。

侮辱された後、韓信は群集をくぐり抜けて、

突然嗚咽がぐつと喉の所を押し附けた。涙が駿々とするのであつた。(中略) 彼はほんとうに、くやしく成つたのだ。――何といふ浅間しさであらう。俺は、あの豚殺しに跨が

られて居たのだ。しかも其れはどんな理由でだ！理由はないのだ！彼はもう総べての理性を失つて居た。(中略) 彼に有る物は、たゞ時の経つにつれて愈々猛烈に成つて来る屈辱の恨みだけであつた。この屈辱の恨みは彼をして後年、あの大將軍としての極めて退屈な荒涼たる生涯を送らせるやうにした最も直接の原因と成つた。(中略) なんといふ浅間しさだ。たくさんの人が見て居た。ほんとうに沢山の人であつた。(188-189)

と、悔しさの描写が続く。その後、彼はがくがく身震いし、歯が熱くなって、きりきり痛んできたという状態になり、そして、

……………出世。……………將軍……………復讐…………… (190)

と狂的な状態に至る。韓信の後の出世には触れずに、作品の重点を屈辱感及び復讐の念頭の描写に置いているのは、原典にはないまったく新しい点なのであり、言ってみれば、太宰の「股をくぐる」は、原典や一般に伝えられてきた韓信像を裏返しにした作品なのである。

この作品の先行研究は極めて少ない。まず作家論からの視点であるが、鈴木二三雄は、太宰治の中国物の「清貧譚」と「竹青」を論じた論文の中で、前書きとして「股をくぐる」に言及し、韓信の復讐の方法は太宰自身の性格から来ていると指摘する<sup>14</sup>。鳥居邦朗は太宰の無頼の意識を論じた際、太宰が優等生になりたいと願望しながら、その実は劣敗者の意識に苦しんでいたため、「『生れて、すみません』という余計者意識は早くから太宰にあった。余計者意識は無頼に向かう一つの入口ではありうる。」<sup>15</sup>と指摘し、この劣敗者意識、余計者意識が太宰の鬱憤さの根本だとした。高橋英夫も現代人が太宰文学をどのようなまなざしで読んでいるかを分析する際、太宰治には、何か気になるもの、不安なものが感じられ、その中でも人間的な傷つき易さと敏感さがまず感じられると指摘する。そし

<sup>14</sup> 鈴木二三雄「太宰治と中国文学(二) — 『清貧譚』と『竹青』」 p.45

<sup>15</sup> 鳥居邦朗「太宰治」(『無頼文学の系譜』、『国文学解釈と鑑賞』 pp.71-72)

てこの二つの特質は、現代の人間が以前にもまして多く持つようになったものであり、したがって、現代の読者は太宰治に自分自身を拡大して見せつけられた気分になるだろうと述べている<sup>16</sup>。

それから、創作手法についてであるが、鈴木二三雄には懐疑的でありながら同時に矜持を持ち、かつ臆病であるという、矛盾を孕んだ複雑な人間性を主人公に付与して小説化する方法は、芥川の初期の古典を材料とした作品、例えば「羅生門」、「鼻」、「芋粥」などの類に用いている方法と近似性が強く、太宰が芥川の作風をかなり模倣したと指摘する<sup>17</sup>。また、創作時代の社会背景の点に触れた中で、藤原耕作はそれが「無間奈落」という同じ習作期の作と同じ程度の「左翼小説」的要素があると指摘した<sup>18</sup>。以上のような作家のおい立ちや性格また時代背景などとの関連を論じた観点は研究資料としては貴重な存在であろうが、本小論はそれよりもむしろ太宰の文学世界という角度から「股をくゞる」という作品を見ていきたい。ただ、作品自体に研究のポイントを置いた先行研究はそれほど多くはなく、『太宰治全作品研究事典』においても「初期習作『股をくゞる』」の「研究展望」の項目で「太宰のユニークな視線をみればよい。」<sup>19</sup>としか述べられていない。本小論はむしろ復讐心を抱かせる原因となった屈辱の心理が「股をくゞる」において、どのように表現されているか、さらに、この心理はどのような意味を持っているのかを究明したいのである。

### 3. 太宰文学における位置付け

「股をくゞる」では、韓信の「忍耐」は何故美德として認められないのであろうか。

<sup>16</sup> 高橋英夫「『傷つき易さ』と生死」(『昭和作家論 103』 pp. 174-175)

<sup>17</sup> 鈴木二三雄「太宰治と中国文学(二) —『清貧譚』と『竹青』」 p 45

<sup>18</sup> 藤原耕作「習作期の太宰治文学—高校時代を中心に—」 P3。藤原氏によれば、韓信が栗飯をめぐって「婆にはあれが必要なんだ。それを俺に呉れる。するとどうなるか。(略)結局は、何時までたつても貧乏任は減らないといふ事になる。」と考えこむ場面や屠殺場の青年等の行動を物質が窮乏したためだという記述などから「左翼思想」が入っていると判断した。

<sup>19</sup> 『太宰治全作品研究事典』 p 133

太宰は「親友交歓」（昭和 21）の中で、無頼漢に対する見方の変化を述べるために、韓信のことに言及している。作家で、田舎に疎開してきた主人公は、ある日小学校時代の親友の訪問を受ける。秘蔵のウイスキーを遠慮なく飲まされ、勝手な放言を聞かされて、女房まで連れ出されてお酌をさせられて興ざめし、味気ない思いにとられられる。そこで韓信の故事を思い出す。

私は、ふと、木村重成と茶坊主の話所思ひ出した。それからまた神崎与五郎と馬子の話も思ひ出した。韓信の股くゞりさへ思ひ出した。元来、私は、木村氏でも神崎氏でも、また韓信の場合にしても、その忍耐心に対して感心するよりは、あのひとたちが、それぞれの無頼漢に対して抱いてゐた無言の底知れぬ軽蔑感を考へて、かへつてイヤミなキザなものしか感じる事が出来なかつた。（中略）之等の美談は、私のモラルと反発する。私は、そこに忍耐心といふものは感ぜられない。忍耐とは、そんな一時的な、ドラマチックなものでは無いやうな気がする。アトラスの忍耐、プロメテの忍苦、そのやうなかなり永続的な姿であらはされる徳のやうに思はれる。しかも前記三氏の場合、その三偉人はおのおの、その時、奇妙に高い優越感を抱いてゐたらしい<sup>ふし</sup>節がほの見えて、（中略）かへつてそれらの無頼漢に同情の心をさへ寄せてゐたのである<sup>20</sup>。

即ち、主人公が「忍耐」という美德を「イヤミなキザなもの」と感じ、一時的な演出は無意味だと考えるようになったことがわかる。実は「忍耐」の美德というよりも「孤独」の気持ちしかないではないかと「親友交歓」で述べ続ける。

しかし、いま眼前に、この珍客を迎へ、従来 of 私 of 木村神崎韓信観に、重大なる訂正をほどこさざるを得なくなつて来たやうであつた。（中略）あの三氏の伝説は、あれは修

<sup>20</sup> 太宰治「親友交歓」（『太宰治全集 8』 pp. 239-240）

身教科書などで、「忍耐」だの、「大勇と小勇」だのといふ<sup>テーマ</sup>題でもつてあつかはれてゐるから、われら求道の人士をこのやうに深く惑はす事になるのである。私がもし、あの話を修身の教科書に採用するとしたらなら、題を「孤独」とするであらう。いまこそあの三氏の、あの時の孤独感を知った<sup>21</sup>。

無頼漢と接触した時の、どうしようもない寂しい気持ちを述べるのである。この「親友交歓」という作品は「股をくぐる」が出来た十八年後に書き上げられたにもかかわらず、「忍耐」に対する見方はなんら変わりはないようである。それから、無頼漢に対する見方も両作品では多少の相似が見出せるのである。「股をくぐる」では「彼は無論これ等の青年に満腔の同情を寄せて居た。愛してさへ居た。」(186)というキザな振る舞いが示されているが、「親友交歓」では、韓信が「高い優越感を抱い」たから、無頼漢の怒りを買ったと語られるようになるのである。このように、韓信の「忍耐」というもともと美德として見なされている精神は、太宰文学においては相当変容してしまうのである。

では、「股をくぐる」に見られる上述の三つの点は、太宰文学から見た場合、どのような位置付けにあるのだろうか。

まず、老婆の醜悪化についてであるが、それは前述の醜悪な外見のみならず、傲然たる愚鈍さや高慢な態度こそ、韓信の不快を買った要素である。「小さい眼を異様に輝かせながら、しげしげと此の惨めな若者の顔を見詰めた。彼はこの老婆の奇怪な顔に、実に苛重な圧迫を刻一刻と感じて来」るし、(178-179)「若い者あ其んなさもしい顔してんのは、をかしいわな。」(179)とか、「そら、これでも食はんかい」(180)というような物言いは少年韓信の不快感を募らせる。「何といふ婆だ！あいつは俺を何とも思つて居ないのだ。どこ迄傲慢なんだ。俺にこの栗飯を渡す時のあの落ち付きはどうだつた。」(182)と韓信は毒づくのである。即ち「股をくぐ

<sup>21</sup>太宰治「親友交歓」(『太宰治全集 8』pp. 240-241)

る」では世話をしてもらおう老婆に対して不満の情を限りなく表したのである。このように世話をしてくれる女性を憎む場面は太宰文学では随所に見られる。

太宰文学には様々な性格の女性が描かれている<sup>22</sup>が、母性的なタイプ、残酷性を秘めた女性、逞しい生命力を感じさせる女性と、不思議な生活力を持つ女性、独特な感覚と心理を持つ女性など様々であるが、「股をくぐる」の中の洗濯婆さんはその中の「残酷性の秘めた女性」に属するだろう。この手の女性は例えば「如是我聞」にも登場する。

頑固。怒り。冷淡。健康。自己中心。それが、すぐれた芸術家の特質のやうにありがたがつてゐる人もあるやうだ。それらの気質は、すべて、すこぶる男性的のものやうに受け取られてゐるらしいけれども、それは、かへつて女性の特質なのである<sup>23</sup>。

このような女性は太宰文学のほかの作品にも存在しており、例えば、「カチカチ山」の「兎」、「人間失格」の女性群、「花火」の節子と、「男女同権」の女性たちなどが挙げられる。女性への不信感と嫌悪感は特に主人公が世話になっている女性によく見受けられるが、以下「男女同権」の女性たちを例としてより具体的に述べてみたい。

「男女同権」の女性たちはすべて悪女である。自分の母親を始め、下女、学校の先生の奥様、勤め先の印刷所のおかみさん、飯炊き、自分の妻たち、さらに吉原の女までを悪女として描かれている。まず、母親であるが、

私の母は、これは継母でもなんでもなく、まことの生み

<sup>22</sup> 東郷克美「女性」(『別冊国文学 太宰治必携』昭和55.9)と「鼎談 昭和20年—23年の太宰治をどう読むか」(『解釈と鑑賞』昭和63.6)、久保喬「太宰文学の女性像」(『太宰治の青春像』朝日書林 1993.6)と、安藤宏「太宰文学における〈女性〉」(『国文学解釈と鑑賞』平成11年9月号)などの資料を参照した。

<sup>23</sup> 太宰治「如是我聞」(『太宰治全集 10』 p 349)

の母親でございましたが、どういふものか弟のはうばかりを可愛がつて、長男の私に対しては妙によそよそしく、意地わるくするのでございます<sup>24</sup>。

というように、母親に軽んじられたことに不満を感じる。また、家の下女にも意地悪くされる。

私のはうから近づいて行きますと、まるで人が変ったみたいに激怒して私を突き飛ばし、お前は口が臭くていかん！と言ひました。あの時のはづかしさ、私はそれから数十年経つてこんにち思ひ出しても、わあつ！と大声を挙げて叫び狂ひたい程でございます<sup>25</sup>。

即ち、こうした女性たちは世話を焼いてもくれるが、その振る舞いには冷たい部分もかなり顕著であるため、主人公はより深く傷つけられるのである。学校の先生の奥様も表面的には世話をしてくれるが、意地の悪さも至るところに表れる。それで、主人公は次のような結論を下す。

女の人のあの無慈悲は、いつたいどこから出て来るのでございませう。私のそれからの境涯に於いても、いつでもこの女の不意に發揮する強力なる残忍性のために私は、ずたずたに切られどほしでございました<sup>26</sup>。

女性のうちで、最もしひたげられ、悲惨な暮しをしてゐるあのおいらんでさへ、私にとっては、実におそろしい、雷神以外のものではなかつたのでした。(中略) こんな具合ひに女から手ひどい一撃をくらつた経験は、もう私にはかざかぎりも無くございますが、その中でも、いまだに忘れ得ぬ恥辱の思ひ出だけを申し述べるとしても、それだけでも、たつぷり一箇月の連続講演を必要とするほど、それほどお

---

<sup>24</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p 251)

<sup>25</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p 253)

<sup>26</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p 255)

びただしいのでございます<sup>27</sup>。

世の女性といふものは学問のある無しにかかはらず、異様なおそろべき残忍性を蔵してゐるもののやうでございまして……<sup>28</sup>

この「男女同権」の文章では、それぞれの女性の残酷な言動を詳細に述べることを通して、新憲法による男女同権を喜ぶべきであり、男女同権なのだからこれからは女性の悪口を言っても構わない…と語る。「私のこれからの余生は挙げて、この女性の暴力の摘発にささげるつもりでございまして。」<sup>29</sup>と皮肉るのである。

それから、人間不信についてであるが、「股をくぐる」では、韓信は老婆の態度を不満に思うだけではなく、老婆の好意に対しても徹底的に不信を抱く。このような対人意識は太宰文学の根幹になっていると言っても過言ではない。「人間失格」の葉蔵は小さい時から周りの人の偽りによって、人間不信になり、「人間は、お互ひの不信の中で、エホバも何も念頭に置かず、平気で生きてゐるではありませんか。」<sup>30</sup>と述べ、「自分は、どだい人間の言葉を一向に信用してゐませんでした」<sup>31</sup>と言う。「ヴィヨンの妻」、「恥」、「男女同権」、「燈籠」などの作品はいずれも、信じていた相手から裏切られ、手痛いしっぺ返しを受けるという結末を迎えるのである。さらに、不信は人間社会だけにとどまらない。例えば「惜別」という作品では、宗教の教義の偽善に疑問を投げかけているのである。

最後に「股をくぐる」に溢れる屈辱感やそれによる復讐心についてである。前述したように、自尊心からきた侮辱感についての描写は全篇の主眼になるのであるが、それは太宰の他の作品においてはどのように表出しているのだろうか。

<sup>27</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p 257)

<sup>28</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p 268)

<sup>29</sup> 太宰治「男女同権」(『太宰治全集 8』 p p 268-269)

<sup>30</sup> 太宰治「人間失格」(『太宰治全集 9』 p 314)

<sup>31</sup> 太宰治「人間失格」(『太宰治全集 9』 p 326)

「思ひ出」の中では、「私の自衿が、その高等小学校を汚く不愉快に感じさせて」おり<sup>32</sup>、「人からどんな些細なさげすみを受けても死なん哉と悶えた。(中略)たとひ大人の侮りにでも容赦できなかつたのである。」<sup>33</sup>というように、自尊心のせいで、屈辱に対して敏感に反応しているのである。また、主人公が文学に熱中していることを郷里にいる長兄に心配され、長い手紙をよこされたことを書いた部分では「なにはさてお前は衆にすぐれてゐねばいけないのだ。」<sup>34</sup>と、選ばれた階級の家生まれたという、逃れられない使命を持たされている。ここから主人公の文学への志向の道が認められない経緯が分かるであろう。

後の作品の「風の便り」では、ある小説家は有名な先生に手紙と自作を送ったが、相手の返事のあまりにも短かすぎることを悩む。「けさ私がお葉書をいただいて、その葉書の処置に窮して、うろうろしたのは、自分の身の程を知らされて狼狽してゐただけの事でありました。少しは私にも、作家としての誇りもあつたのでせう、その誇りのやり場に窮して、うろうろあのお葉書を持ち廻つてゐたのに違ひありません。」<sup>35</sup>と謙虚な口調でありながら、相手に軽んじられたことに思い悩む状態がこの部分から窺えるだろう。これと似た描写は「恥」という作品からも見られる。

「恥」では、ある 23 歳の女性「私」が戸田という作家の貧しく病弱な作中人物を作家自身のことと見なして、作家に励ましの手紙を出す。さらに作家の自尊心に顧慮し、わざと自分の顔を醜くし、汚い身なりで、作家に会いに行く。しかし、実際に作家は作中人物とはまったく違っており、作家に馬鹿にされたため、「私」は赤っ恥をかく。そして、その鬱憤を発散するために、友人に書簡を出し、「小説家なんて、人の屑よ。いいえ、鬼です。」<sup>36</sup>とののしるとい

<sup>32</sup> 太宰治「思ひ出」(『太宰治全集 1』 p 23)

<sup>33</sup> 太宰治「思ひ出」(『太宰治全集 1』 p 23)

<sup>34</sup> 太宰治「思ひ出」(『太宰治全集 1』 p 34)

<sup>35</sup> 太宰治「風の便り」(『太宰治全集 4』 p 273)

<sup>36</sup> 太宰治「恥」(『太宰治全集 4』 p 324)

う物語である。赤木孝之は「風の便り」と「恥」の二作を太宰の自己醜悪化した作品だと見て、「自己を悪魔的なものとして描くことの代償として太宰は秩序を、安心を、生き甲斐である芸術を得た。」<sup>37</sup>と指摘する。それはそれなりの説得力があると思うが、ここで私が問題視したいのは、この二作における屈辱感の大本はやはり相手に重要視されず、自尊心が傷つけられたことから来たものだという点である。前述したように、「股をくぐる」における韓信と洗濯老婆とのやり取りの中では、恩を感じるのではなく相手に不満を持ち続けるのは、老婆に自分の存在を認めてもらえなかったからなのである。

また屈辱感に対する対応についてであるが、高橋英夫は、太宰文学においては、人間的な傷つき易さと敏感さの対応は種々の形をとって外に現れ、それがユーモアや道化性となっていると指摘している<sup>38</sup>。しかし、ユーモアや道化性以外の形を取り、その鬱憤さを発散させているのもあるのではないだろうか。「股をくぐる」では、洗濯婆さんから受けた屈辱感は、確かに少年の傷つき易さと敏感さによるものであり、その気持ちを落ち着かせるには彼には復讐の方法しかないのである。原典の韓信故事では、大將軍になって、亭長を見返したり、屠殺場の少年に、悪に報ゆるに善をもってするというやり方で見返しているが、「股をくぐる」ではそこまで発展せず、復讐心が湧き上がり、復讐の行動を想像した所で止まっているのだ。こうした復讐行動は、太宰文学の他の作品でも、様々な形で表されている<sup>39</sup>。無論、「風の便り」のように抗議の手紙を出したり、あ

<sup>37</sup> 赤木孝之「太宰文学における芸術至上主義」(『太宰治 彷徨の文学』p 83)

<sup>38</sup> 高橋英夫「『傷つき易さ』と生死」(『昭和作家論 103』pp. 174-175)

<sup>39</sup> 作家論的な観点もあるが、「道化の華」では、語り手は「僕はなぜ小説を書くだろう。新進作家としての栄光がほしいのか。もしくは金がほしいのか。」と自問し、「僕はなぜ小説を書くのだろう。(中略) 仮り一言こたへて置かう。『復讐』のためだと答える。」(太宰治「道化の華」(『太宰治全集 1』p 148) という内容に対して、赤木孝之は「復讐とは、語り手が、自分を投影させて描いた葉蔵をヤリ玉にあげることである。(中略)『道化の華』は作家太宰治が、作家になることを余儀なくさせた生活人津島修治の弱さに復讐する小説なのだ」と指摘した。(「太宰文学における芸術至上主義」p

るいは、「恥」のように相手をののしったりしたという方法もあるが、他にも次のような形がある。

例えば、「人間失格」の主人公の葉蔵が中学時代に、体操の時間に鉄棒の練習で故意に尻餅をついて皆を笑わせたことに対して、学友の竹一は「ワザワザ」と葉蔵の耳もとで囁く。相手が馬鹿な学友であっただけに葉蔵は多大な恥辱を覚え、この学友に復讐することを心の中に誓う。しかし、結果としては、みんなに馬鹿にされているこの学友の中耳炎の膿を脱脂綿で掃除してあげることになる。これはまさに「股をくぐる」の原典に出てきた「悪に報ゆるに善をもってする」という形である。

さらに、より積極的な態度で生の屈辱感に対応している作中人物もいる。例えば「ヴィヨンの妻」の中の妻である。妻は夫のファンの若者に暴行されるが、この様な屈辱に面して妻は落ち着いており、夫にも告げないでいる。さらに「人非人ではない」という夫の弁解に、妻は「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」<sup>40</sup>と答える。夫と妻が二人とも屈辱された暮らしを続ける中で、悲哀感を漂わせながらも、妻は夫を導き前向きで歩いていこうとする態度をとるのである。

「斜陽」の中のかず子はさらなる力強さを発揮している。離婚して、出戻りしたかず子は敗戦後に、貴族の気品を持つ母親と東京の大きな邸宅を処分して、静かな伊豆の山荘に引っ越す。貴族の没落による屈辱感は、表にははっきりと出ない。なにしろ、母親は依然として、貴族のような優雅な振る舞いをし続けるからである。しかし、その中に無尽な悲哀感が潜んでいるのも事実である。この屈辱感への対応は、貴族の感性を否定することによって、再生の可能性が与えられるだろうと考え、かず子は道徳革命を進める決意をする。

私は、勝ったと思つてゐます。マリアが、たとひ夫の子で

---

78)

<sup>40</sup> 太宰治「ヴィヨンの妻」(『太宰治全集 8』 p 334)

ない子を生んでも、マリアに輝く誇りがあつたら、それは聖母子なるのでございます。私には、古い道徳を平気で無視して、よい子を得たといふ満足があるのでございます。

(中略) 所謂悪徳生活をしとほす事のはうが、のちの世の人たちからかへつて御礼を言はれるやうになるかもしれません(中略) こひしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます<sup>41</sup>。

このように、家庭を持つデカダンスの作家の子を懐妊して、自分がこれからどう生きるかを自分で決断するのである。

以上述べてきたように、屈辱感を引き出す事柄は様々であり、と同時にその対応も多様である。ユーモアや道化性のほかに、自己嫌悪や自己喪失という形をとることもあれば、攻撃心を持ち、相手をののしったり、軽蔑したりする場合もある。あるいは、「ヴィヨンの妻」と「斜陽」のように、傷ついたにもかかわらず、前向きになっていくのも生きていく方法の一つなのであろう。この習作期に書いた短篇においての復讐の念頭が、以上述べてきたようにその後の太宰文学の中で多様に展開されているのである。

#### 4. 終わりに

以上述べてきたように、女性に対する嫌悪感や人間不信、また屈辱感及びその対応などの、太宰文学における重要なテーマは、すでに習作期の作品の「股をくぐる」に内包されている。したがって、太宰文学の研究において「股をくぐる」は決して見過ごすことのできない作品なのではないだろうか。

韓信の「股くぐり」事件をめぐっては、従来の観点は、これは倫理的美徳であり、出世にとっての重要な条件であるというように見なされていた。たとえ武者小路実篤の、屈辱を詳細にリアル的に記述したという作でも、その鬱屈した心理状態の背後に主人公の自

<sup>41</sup> 太宰治「斜陽」(『太宰治全集 9』 pp. 164-165)

負心が描かれ、また人相見の「貴君の相は百万人の将になる相だ」という言葉が大きな支えとなっているため、結果は依然として後の立身出世への希望を持っているのである。しかし、以上の説とは違って、太宰のこの作で徹底的に「堪忍」の美德を否認し、さらに屈辱によった不快感を無限大に描写の重点に置いているのである。韓信の「股くぐり」事件をめぐる作の中では特色作だと言ってもよからう。

また中国の文学が日本文学の中でどのように扱われているかを考えることから、日本文化の特徴の一つを見出すことも可能なのではないだろうか。本稿で論じてきた太宰の「股をくぐる」は、『史記』の「淮陰侯列伝」の数十日の時間設定を変え、ほんの一日ぐらいの物語として書かれている。そして中国の名将の大功名の元ともなる「忍耐力」を借りつつも、自分の鬱憤の情を訴える作品となっているのである。このように、中国のスケールの大きい一人の武将のある出来事に絞って、まったく個人的で、肉感的な世界に変えている、一系列の韓信像の作品の中では極めて異色の作だと言える。しかし、これを日本文学という軸の中で見れば、それは決して太宰においてのみ見受けられる方法や特色だと言い切ることはできないだろう。

創作方法という面から「股をくぐる」と酷似した作品と言え、松尾芭蕉の「芭蕉野分して盃に雨を聞夜哉」を例として出さなくてはならないと思う。それは杜甫の「茅屋秋風ノ為ニ破ラルル歌」を敷衍した作でありながら、社会問題に最大の関心を持った原典のスケールの大きさを、作者は自分の一時的な感覚を表すものに翻案したものである<sup>42</sup>。このように中国の文献や歴史人物の実態を軽んじて、自分の思想や境遇だけを現すためだけに用いた例ははすでに日本の伝統文学の中に存在しており、他にもまだ無数の例を挙げることができるであろう。日本文化の特徴を説明する際、このような日本文学における中国素材の扱い方は、一つの適切な事例として挙げ

<sup>42</sup> 松尾芭蕉（『芭蕉句集』小学館 p p . 27-28）

ることができるのではないかと思うのである。

テキスト：

1. 太宰治（1991）「股をくぐる」 『太宰治全集 12』筑摩書房
2. 太宰治（1989）「思ひ出」 『太宰治全集 1』筑摩書房
3. 太宰治（1989）「道化の華」 『太宰治全集 1』筑摩書房
4. 太宰治（1989）「風の便り」 『太宰治全集 4』筑摩書房
5. 太宰治（1989）「恥」 『太宰治全集 4』筑摩書房
6. 太宰治（1990）「親友交歓」 『太宰治全集 8』筑摩書房
7. 太宰治（1990）「男女同権」 『太宰治全集 8』筑摩書房
8. 太宰治（1990）「ヴィヨンの妻」 『太宰治全集 8』筑摩書房
9. 太宰治（1990）「斜陽」 『太宰治全集 9』筑摩書房
10. 太宰治（1990）「桜桃」 『太宰治全集 9』筑摩書房
11. 太宰治（1990）「人間失格」 『太宰治全集 9』筑摩書房
12. 太宰治（1990）「如是我聞」 『太宰治全集 10』筑摩書房
13. 『十八史略 卷之二』（1978） 『漢文大系（五）』 新文豊出版
14. 司馬遷「淮陰侯列傳第三十二」 『史記卷九十二』粹文堂

参考文献

1. 武者小路実篤（1924）「韓信の股くぐり」 『武者小路実篤全集』第五卷 芸術社
2. 長与善郎（1924）『韓信の死』 玄文社
3. 長与善郎（1925）「項羽と劉邦」 『現代戯曲全集』第八卷 国民図書株式会社
4. 文部省（1938）「張良と韓信」 『小學國語讀本卷十 尋常科用』日本書籍株式會社
5. 鈴木二三雄（1969）「太宰治と中国文学—『清貧譚』と『竹青』」 『立正大学国語国文第7号』 立正大学国語国文学会
6. 鳥居邦朗（1970）「太宰治」 『無頼文学の系譜』、『国文学解釈

- と鑑賞』 至文堂
7. 東郷克美（1980）「女性」 『別冊国文学 太宰治必携』学灯社
  8. 東郷克美（1988）「鼎談 昭和20年—23年の太宰治をどう読むか」『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂
  9. 松尾芭蕉（1989）『芭蕉句集 日本の古典54』 小学館
  10. 長尾篤巖（1989）「太宰治における中国文学の影響」 『太宰治・第5号』洋々社
  11. 赤木孝之（1990）「太宰文学における芸術至上主義」 『太宰治 彷徨の文学』洋々社
  12. 高橋英夫（1993）『『傷つき易さ』と生死』 『昭和作家論 103』小学館
  13. 久保喬（1993）「太宰文学の女性像」 『太宰治の青春像』朝日書林
  14. 神坂次郎（1994）『男戦いの日々：海の彼方の八つの話』 PHP 研究所
  15. 岡本好古（1995）『背水の陣：悲将韓信の生涯』 新人物往来社
  16. 神谷忠孝、安藤宏（1995）「初期習作『股をくぐる』」 『太宰治全作品研究事典』 勉誠社
  17. 石山隆（1996）『漢王劉邦物語』舵社
  18. 若林力、高野由紀夫（1999）『漢文名作選第2集 英傑の群像』 大修館書店
  19. 安藤宏（1999）「太宰文学における〈女性〉」 『国文学解釈と鑑賞』
  20. 机竜人（2000）『大軍師韓信』叢文社
  21. 岡本好古（2001）『韓信：「国士無双」と謳われた天才武将』 PHP 研究所
  22. 藤原耕作（2006）大分大学教育福祉科学部研究紀要 vol.28 No.2